

文化財報告第5集

大井戸跡発掘調査報告書

大井町教育委員会

序にかえて

大井町にとって貴重な文化遺産である大井戸跡の発掘調査報告書を刊行いたすはこびとなりました。

大井戸跡は町名発祥の地といわれ、かねてからその所在について郷土研究会はじめ多くの郷土史研究者によって探し求められておりました。

この井戸に関する文献はなく、確たる場所はわからないが、古老の話しや、地形などから分析し、このあたりではないかと思われるところがあった。この附近がちょうど現在おこなわれている荒川右岸流域下水路整備事業の計画線内に当ることになったことから、大井町教育委員会では、地域開発にともなう発掘調査としてこの実施を県に依頼、県の委託によりこれが実現したのであります。

この発掘調査は、町民各位の絶大なる御支援と御協力もあり、郷土史愛好者の注目を集めながら昭和50年2月17日から約1ヶ月を要して行われ、待望の大井戸跡の所在をつきとめ、その全ぼうをみることができたのであります。

この調査にあたり地主である塩野利夫氏の御理解ある御協力が得られ、松本新八郎氏、小泉功氏には御多忙のところにもかかわらず調査担当員として御指導いただき、また坪田幹男氏はじめ専修大学生など多くの学生、郷土研究会の方々の御尽力によりまして、立派な成果をおさめることができましたことに対し、心から感謝申し上げます。

この報告書が、地域史研究に大いに活用され、また寄与することを期待する次第であります。

昭和51年3月20日

大井町教育委員会教育長 小 室 宏

例 言

1. この報告書は、埼玉県入間郡大井町218に所在する大井戸跡発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、埼玉県の委託を受けて、大井町教育委員会が主体となり、(昭和50年2月19日から同年3月26日まで)実施したものである。
3. 本調査は、松本新八郎、小泉功が担当し、調査員として坪田幹男、鹿島英明、山口清貴、佐々木栄一が協力した。
4. 本書の執筆は、松本新八郎、小泉功、坪田幹男、鹿島英明が記述した。
5. 尚、この調査に協力された人々の氏名は、本書に後記し、厚く御礼の意を表する次第である。

目 次

1. 大井戸の位置	5
2. 大井郷の歴史的環境	6
3. 発掘の経過	8
4. 一号井戸 (1) 遺 構	13
(2) 出土遺物	14
(3) 全 測 図	15
(4) 断 面 図	16
5. 二号井戸 (1) 遺 構	17
(2) 出土遺物	17
(3) 全 測 図	19
(4) 断 面 図	20
6. その他の遺物	21
7. 一号井戸所見	23
8. 二号井戸所見	24
9. 附説 参考文献	
附 1. 新編武蔵風土記稿 (抜すい)	25
附 2. 武蔵国高麗郡下仙波内大井村田畑水帳 (元禄 9 年)	
に記されている「おいど」	26
附 3. 武蔵国入間郡大井町一筆限斜詰記の図	27
10. 総括と考察(一号井戸)	28
11. 写真図版	29

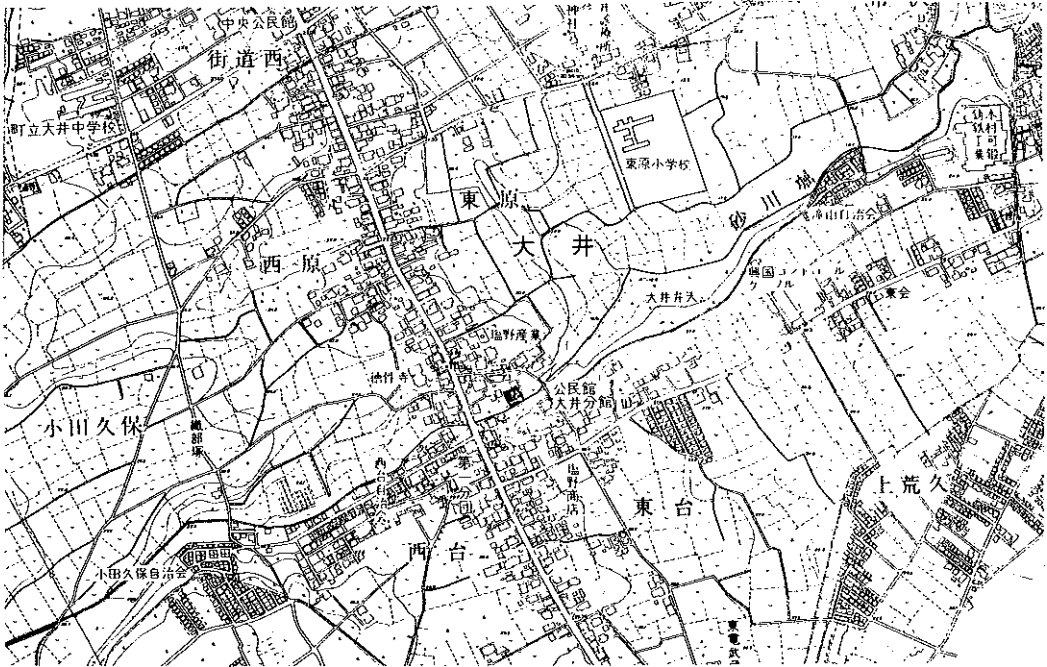
挿図・図版目次

大井戸の位置図	6
発掘調査区全測平面図	12
1号井戸平面図	13
1号井戸断面土層図	13
1号井戸出土遺物実測図	14
1号井戸全測図	15
1号井戸断面図	16
2号井戸出土遺物実測図	18
" 全測図	19
" 断面図・土層断面図	20
その他の出土遺物	21

写真図版目次

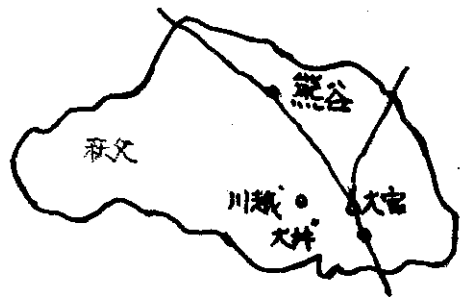
図版1. トレンチの状況	29
" 2. 一号井戸遺構	30
" 3. "	31
" 4. 二号井戸遺構	32
" 5. 二号井戸井筒内木枠	33
" 6. 一号井戸出土遺物	34
" 7. 二号井戸出土遺物	35
" 8. その他の遺物	36

大井戸の位置



大井戸遺跡は東武東上線鶴瀬駅と上福岡駅との中間字市沢の西南に約1.1km、埼玉県入間郡大井町大字大井字東原219番地(1号井戸)、216番地(2号井戸)に所在している。

今回調査した井戸遺構は荒川右岸の武蔵野台地を開折して西から東へ流れる曾称川(俗称砂川堀)の左岸に隣接したもので、川と井の間は川の土あげ敷(約1m)を兼ね井戸の上縁となっている。



曾称川の台地上、大井山には先土器文化の礫器が出土している。この台地と曾称川の谷底との比高は約6mを有し(曾称川谷底は標高約20m)この谷底を掘りぬいて井戸が築かれている。したがってその深さは約3mで比較的浅くてすんでいる。この井戸のある曾称川のすぐ下流には、弁財天社、滝山、殿山下などに湧水池があり、古老の話によると「弁財天社より上では、曾称川は冬に水が枯れた」と語っており、この水枯れは古くからで、したがってその脇に井戸を掘ったのである。

大井郷の歴史的環境

大井郷は武蔵野の中心にあたり、徳川期の初めまでその名残りをとどめていました。なかでも、大井戸のあたりは、武蔵野にできた曾祿川の河原を利用して、歴史とともに開けた地域であることは、考古学によっても証明できます。

曾祿川が市沢や苗間に至る沼沢地が水田化されるにつれて、大井戸のあたりは神聖な水源と考えられた形跡があります。北には水神と呼ばれた根ノ上権現があり、南の台地上には稲荷社や弁天社があり、この地が集落の祭祀の中心

でありました。それに、台地をおりてきた街道（旧鎌倉街道）が、この井戸のそばで分岐して、一つは市沢から寺尾へ、一つは地藏堂から川越に、といった交通の要地にもなっていました。

万葉集の“いりまじの おほやがはら”の歌はこの地のことだといわれます。曾祿川を溯った武蔵野も、奈良、平安期には開墾されたらしく（荒墾）ふうでん（風田）げんにゆう（現入）等という古い字名があるのでわかります。それに、亀久保の地藏堂は坂上田村麻呂が創建したという縁起のあることから、万葉の頃にはすでに開かれていたのかも知れません。

大井戸はその位置や形態からして、当時から、集落の共同井戸としてだけでなく、街道を往還する宮人、旅人、商人たちの憩いの場であったと考えられます。当時は、入曾の七曲井より、は、堀兼のまいまい井戸に近い形をしていたでしょう。そして、平安の末頃、武蔵七党の村山党の一派が、この地に住んで大井氏を称したというのも、この大井戸によって姓を立てたと考えられます。



旧沼沢地から曾祿川を経て大井台地を望む



大井弁天社とその附近(旧沼沢地)

鎌倉期には、大井氏の城郭が稲荷社と弁天社のあいだの台地上にあったらしく、また、亀久保の地藏堂は幕府の政所に参画した二階堂氏が再建したという伝承などもあって、この大井戸にかかわりがないとは思えません。

大井戸はその一族郎等の用水でもあり、そのために、井戸周縁の漏斗形の野芝生の部分がくずされ、口縁部に流し場や足場がつくられて、今日発掘されたような形態のものになったかと考えられます。

この大井戸は、南北朝から戦国期にかけては、共同井戸というよりは、大井郷の祭りや寄合いの場として、新しい意味をもったでしょう。道興准後の廻国雑記の“うちわたず おおいがはら”の歌は、市沢のあたりから、大井戸周辺の鬱蒼とした景観を詠んだのでしょうか“山や嵐の名を宿すらん”というのは、台地上の大井氏の落城を語っているともとれなくはありません。というのは、当時、大井郷の農民は部落ごとに一揆して、郷侍に率いられて、大井氏のような旧名族を追っばらっていたからです。

戦国期には、郷侍が一揆を率いて、あるいは上杉氏に、あるいは小田原北条氏に、となびいていました。その状態は、塩野家所蔵の天正15年の大井百姓中にあてた北条氏の触書きで想定できるのです。そして、この大井戸が大井郷の祭祀と寄合の場として神聖視されていたからこそ、いく度かの動乱を経ても、古代のままの井筒や湧口を保存してきたといえます。

けれども、徳川期のはじめ、新たに川越街道が開かれ、大井郷が代官領になると、この大井戸も千年の歴史を終えるのです。それでも村人は、大井戸に住居を構えた塩野家に“おるど”の屋号を付けて、これを記念したのでした。



弁天社附近を流れる曾祿川と市沢を望む

発掘調査の経過

○ 2月17日

砂川堀に対して垂直に横4m縦18mのトレンチ（以下「T」とする）を設定し、掘り下げる。レベル原点移動のため近くの徳性寺より砂川堀左岸土手に移動。

○ 2月18日

霜のため作業開始時間が1時間ほど遅れる。昨日の続きで土層をおいながら掘り下げていく。

○ 2月19日

第1Tを6つのサブTに分け東側の北から南にかけてNMSとし、西側を同じくN'M'S'として掘り下げていく。初めに東側のNMSから行なう。

○ 2月20日

昨日に続きNMS及びN'M'S'を掘り下げる。M及びM'に溝状遺構（長さ1m、巾25cm、深さ15cm）がみつかる。

○ 2月21日

雪のため作業中止。

○ 2月22日

昨日の雪のため作業が遅れる。第1Tに垂直に東西へ1m×16mのトレンチを設定。これを第2Tとする。これを西側から4mずつに区切り1区、2区、3区、4区とし、それぞれ掘り下げる。

○ 2月23日

新しく第2T4区の北側に南北にのびる第3Tを設置。第2Tの南面のセクション図に取る。

○ 2月24日

立川砂礫（以下、砂礫層とする）層まで下げた第1Tの写真撮影とセクション図取りを行ない、次に平板に入れる。

第2Tの3区までセクション図を取る。新たに第3、第4Tを設置し、掘り下げる。



○ 2月25日

昨日に引続き第1Tのセクション図取り、第2T、4区、第3Tのセクション図取りを行なう。第4Tは1区、2区を掘り下げる。第4T3、4、5区を新たに設置。第5T設置。第1Tを平板に入れる。第2Tの1区と2区を平板に入れる。

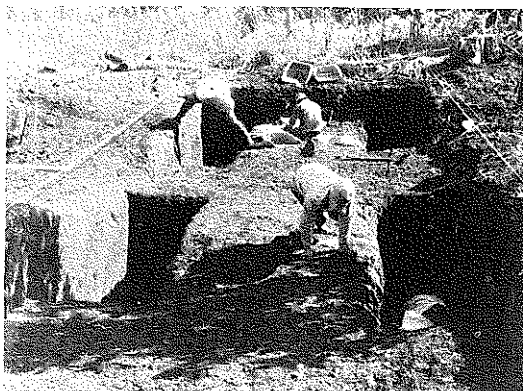
第4T1区中央よりやや西側に高いレベルの黒色の礫を確認。この礫は弧状で巾60cmあり、南側にはしる。

○ 2月26日

第1 Tはセクション図取り。第2 Tは4区はセクション取りし、2区のセクション層序分けを行う。第3 Tセクション層序分け。第4 T掘り下げ。

○ 2月27日

第1 Tはセクション層序分けを行ない、写真撮影。第2 Tは1～4区南壁、1区北壁セクション写真撮影。第3 T砂礫層まで掘り下げ、セクション線引き。第4 Tの1～6区の掘り下げ。第6、第7 Tの設置。



第4 Tの礫はあまり厚くなし。第3 Tより（石器）と土師器片ほぼ砂礫層上で出土。

第4 T、5区の東側に1 m×4 mの7区、1区の西側に同じ1 m×4 mの0区を設置。第4 T、3区の北側2 mに南北に1 m×12 m、南から1区、2区、3区の5 Tを設置。4 T、6区北側1 mのところと同じく南北（1 m×12 m）の第6 Tを設置。

○ 2月28日

第1 Tの平面図作製。第2 T、3区、4区の断面図作製。第2 T 4区東側に1 m×1 mのテストピットを設置し、砂礫層を約1 mまで掘り下げた結果異状は認められなかった。3 Tの断面図作製。4 T 1区～5区までを砂礫層まで掘り下げるが異状なし。途中4区と6区から縄文中期と早期の土器を出土。井戸らしい遺構に関連するものがなく、新しく3 T東側1.5 m×1.5 mの坪掘り区（7 T）を設置し掘り進む。

○ 3月1日

4 T 0、6、7区を砂礫層まで掘り下げる。0区の東南隅に黒色の礫を含まない層を確認。東隣の1区の高い礫と関連がある模様。5 T 1区～3区を掘り下げる。4 Tの標準層位は一層褐色土、二層黒色土、三層黒色礫層、四層赤褐色砂礫層（立川砂礫層）。4時30分から宿舍の清掃。

○ 3月2日

4 T 6区より砂川掘寄り5 mの地区1.5 m×1.5 mの第8 Tを設置し掘り始める。4 T 0区～7区までの断面図作製に取りかかる。第7区の土層断面図作製。5 T、6 T各々掘り下げる。

○ 3月3日

第2、第3、第4（0区）第7 Tの平面図作製。第1 Tの西側約25 m附近に東西に1 m×4 mの12 Tを設置。第8 Tを砂礫層まで掘り下げる。

○ 3月4日

第5 T、第6 Tのほぼ中央より北側に1.4 mの第10 Tを設置。第5 T、第6 T共井戸関連の遺構には関係がない。両 T、特に第5 Tから縄文土器を数点出土した。



午後から多福寺、七曲井を見学。

○ 3月5日

第4 T O区東南隅のピット状落ち込みを掘る。落ち込みから須恵器の胴部一片を出土。O区と1区の境のベルトを取りはずし、その南側に1.4 mの第14 Tを設置し拡張する。第10 Tを砂礫層まで掘る。ほぼ井戸の場所は第4 T O区～1区南側にあると確定。そのため、他のトレンチ掘りが手薄になりつつあったが、完掘をめざす。

第1 T N' 区の西側に1.5 m×1.5 mの第13 Tを第

1 T 溝状遺構延長上に設置し発掘したが、溝は確認できなかった。

○ 3月6日

雪のため作業中止。

○ 3月7日

第4 T 土層断面図完了。第5、第6 T 共本日をもって砂礫層まで掘り下げる。第13 T 完掘。

○ 3月8日

第14 Tと第4 Tとの境のベルトを取りはずす。ベルトを境に北側の黒色礫層の下は、礫がなく、粘土層がある。第14 Tの東側に2 m×4 mの第15 T（第14 T 東側拡張区）を設置。第14 Tのほぼ中央より、やや南側に土手状に礫が一段高い遺構を確認。第4 T 1区に出た遺構との関係が強い。

○ 3月9日

一号井戸東西の土層断面図を作製。ベルトを取りはずし井戸底を出す。井戸の中心より西寄りに大（20 cm）、小（5 cm）の河原石で組んだ石組を確認。井戸内は周囲から流れこんだと思われる人頭大の石で埋まり、覆土は黒褐色、褐色砂礫層である。

○ 3月10日

1号井戸のベルトの西側をとりはずし岩盤を出す。石組内の底に黄色い砂層が薄く一層たまっている所から井戸の絶体的証拠をつかむことができた。

○ 3月11日

井戸内の泥上げを行ない。第14 Tの東壁セクション面を清掃し、土層断面図を取り、写真撮影を行なう。

○ 3月12日

第14 Tの東壁の層序判別及び第14 T、第15 Tのベルトを取りはずす。ベルト下より陶器が出土。第15 Tへ黒色の礫を追う。第16 Tの表土を機械ではぐ。

○ 3月13日

昨日に続き第16 Tを掘り下げ、黒色の礫にぶつかる。この礫面にも土手と同じ高さで確認で

きたがトレンチの北西部でカーブして井戸を囲む様である。

○ 3月14日

第15Tの黒色の礫面を完全に出す。第16Tの底部を掘り下げる。第14Tの西側に、2 m × 4 mの第17Tを設置し掘りはじめる。第12Tの1区を掘り下げた所にもう一つの井戸を確認、2号井戸と呼ぶ。地表面から約80cmの所で、最近まで使用されていたものらしい。

○ 3月15日

第16Tの礫面を追う。第17Tで砂礫層を出しそれを追う。第4 T 1区に出ていた黒色礫面は、第17Tのところの南側にかろうじて確認できた程度で、続きそうにない。第16T、第17Tから出土した遺物のレベル取りと写真撮影を行なう。第12Tを北側に1 m × 4 m拡張。

○ 3月16日

2号井戸は、直径が80cm足らず、深さがかなり深い模様で、土層断面図を作製するのに困難をきたす。層が変わる度に断面図を作製していった。第17Tの南、東壁の土層断面図作製。第4 T 1区からの続きのベルトは第17Tでは第4 Tと第17Tの境のベルト下で切れている。切られている形跡は、断面図から判断してない模様。

○ 3月17日

1号井戸周辺遺構の平面図作製。2号井戸は地盤が大変ゆるく危険をとまなう。川越高校郷土部生徒の応援。

○ 3月18日

1号井戸東側の一段高い土手状の礫は、東へ約3.5m延びて終っている。その土手の北側は、この遺構よりも新しい時代と思われる溝によって切られている。このことは土層からも判別できる。2号井戸は、土層が変わるごとに随時断面図を作製していく。

○ 3月19日

1号井戸（第18T）の東、南壁土層断面図作製。第5 T、第9 T、第10T、第6 T土層断面図終る。ここへきて川高生の応援のためか作業が進む。2号井戸で木組を確認、組み方は不明だが、材質は松の木と思われる。

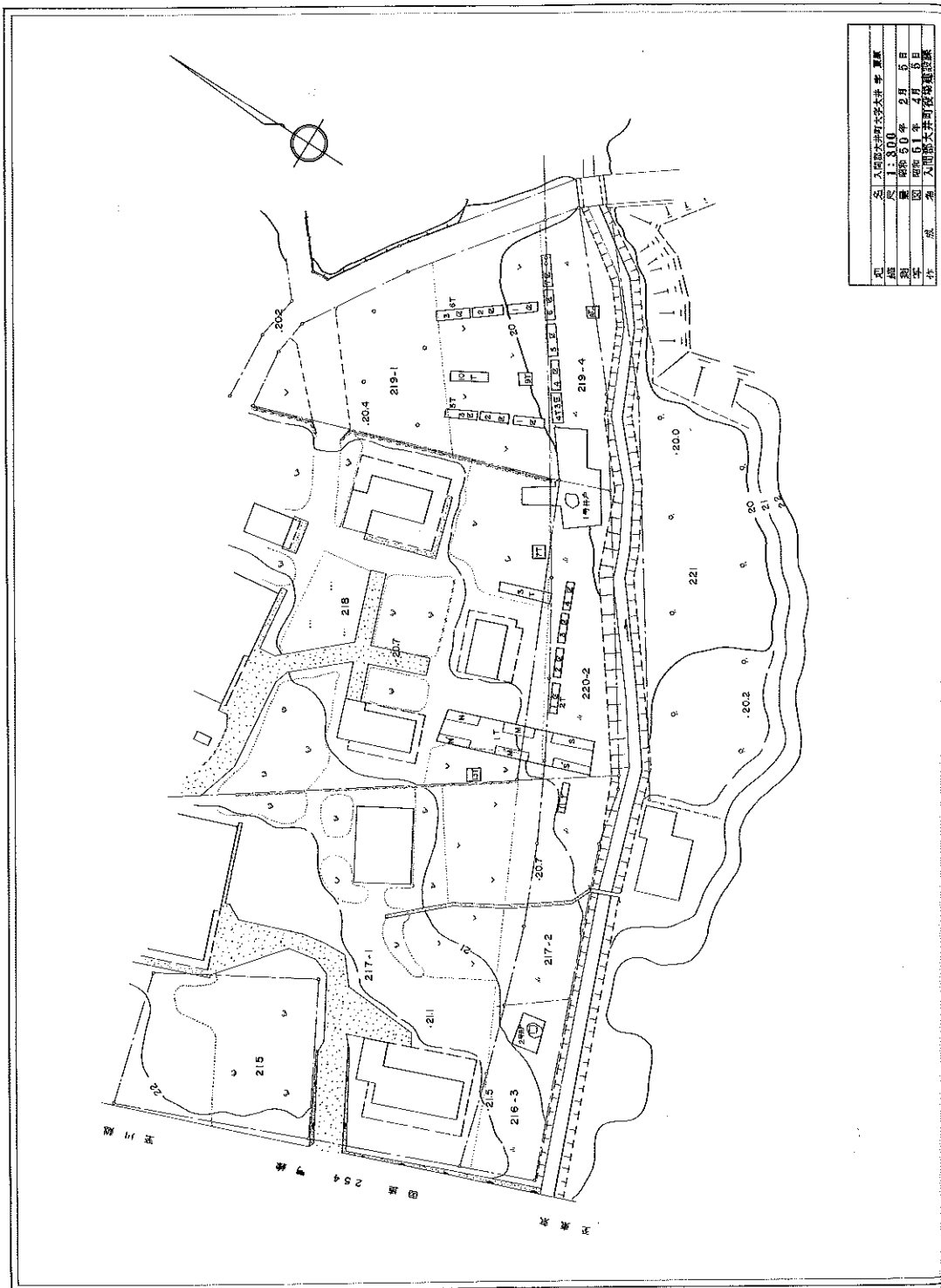
○ 3月20日

一号井戸周囲の北東側の土手の延長を知るため、第17Tとの境のベルトをはずし、拡張したが、全く続いていない切られた形跡もないことから、一応そこで井戸周辺遺構を完全に出し終える。2号井戸は更に作業を続行。

○ 3月21日

昨夜の雨のため1号井戸に溜った水を汲み出す。二号井戸は地表面からの深さ約4.3m掘り下げた所で、地盤が軟弱になってきたため、危険防止の金網をまわりにめぐらす。井戸に関係ないトレンチの埋戻しを全て完了する。

発掘調査区全測平面図



記	入館後大井町大字大字	夏
用	昭和30年	2月
製	昭和31年	4月
定	昭和61年	4月
作	入館後大井町大字大字	夏

1号井戸遣構

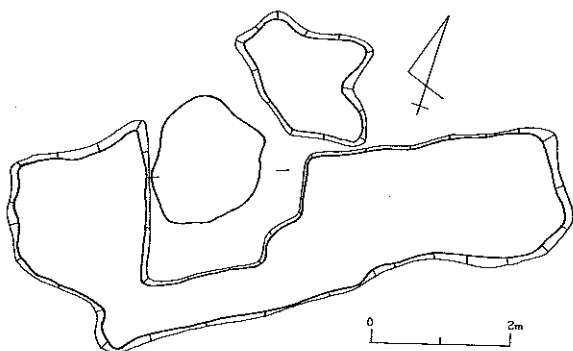
大井戸の全形は橢形を呈し、底面の西側寄りには三段に組みかさねた円形の石組みの遣構がみられた。

井戸の施設遣構として、井戸上縁部より約15cm盛られた土手状敷石面が南で60cm、東西1m30cmの幅をもち井戸をとりまいている。敷石面の最長部は東西7m90cm、南北4m20cm、北側は後世の攪乱により切られているため、一部しか残っていない。

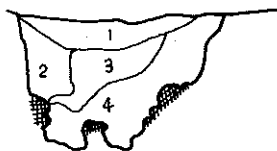
1号井戸の上縁プランは、南北に長い楕円形で長軸1m80cm、短軸1m50cm、現地表面から底面までの深さ約3m、施設遣構からの深さは約1m20cmである。傾斜はきついところ(西側)では60度を越すが、概ね45度前後のところが多い。概して上部で緩く、下部では比較的急傾斜を呈している。尚、積石は大きさまざままで、大きいものは人頭大、小さいものでは径5cm程度の河原石を三段に組んでいて、内径約30cm、積石を含む外径は約60cmである。また積石上部からの深さは約30cmで底面は岩盤に達していた。積石は整然と残っていたが、積石の東側は、大小の河原石が土砂と共に流れ込んでおり、それは、井戸上縁部に敷かれていた石が落ち込んだものと考えられる。

施設遣構は小礫を敷いてあり、井戸上縁部より約15cm高くなっている。この施設遣構は水汲み、洗濯その他の便宜を図っていたと思われる。そして、これは井筒の保護、また戻り水防止の目的を兼ねていたのではなかろうか。北側は後世の溝によって切られ、全形を明らかにすることはできなかったが、おそらくこの施設遣構は井戸をめぐるっていたと考えられる。またこの施設遣構は北にのび、その一部が残っている。神明社(水神様)が更に北に存在していることなどから考え、水汲みの通路は北側へと伸びていたと思われる。

井戸の内側の底面には細かい砂の層が堆積しており、自噴の水圧の様子を知ることができる。



1号井戸平面図



1号井戸土層断面図

1. 植物有機質の根を多く含み、褐色土が混入した黒褐色土層で粘性がある。
2. 1層より褐色土が多く更に有機質の植物が多い粘性ある黒褐色土層。
3. 粘性のある砂礫を含む褐色砂礫層。
4. 3層より明るい褐色をおび粘性のある砂礫層。

1号井戸出土遺物

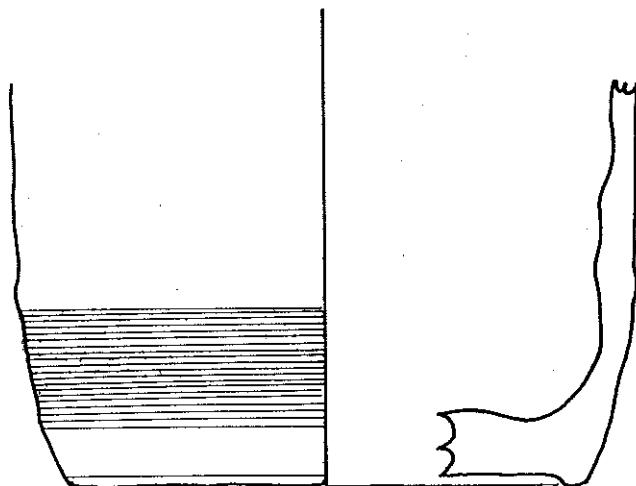
発掘によって得られた遺物は、ダンボール箱に約1箱であった。これらの遺物は破片が多く図示できるものは少ない。

井戸の北部上縁部より、須恵器胴部一片（挿図4）を出土。最大巾は1.2cm、平行状叩き目による焼きの甘い土器で、胎土は稠密の粘土を使用している。遺物からの時代判定は困難である。又、井戸の南側（施設遺構の外）から縄文土器胴部、口縁部それぞれ一片ずつ出土。東側の施設遺構上から大甕の胴部を出土、厚さ1cmで内側は櫛目模様がついている。井戸の西側の暗褐色層から高台付きの茶碗の底部一片を出土（挿図5）内側は透明彩がかっている。また1号井戸（14、15、16、17、18T）の表土から、縄文土器数点、2層目から全面透明彩のかかった陶器の胴部を出土、厚さ6mmで中央部分に把手が残っている。又、井戸南側の褐色礫層中から焼きの甘い須恵質の口縁部一片と、表土からも同様なものが出土している。

挿図4

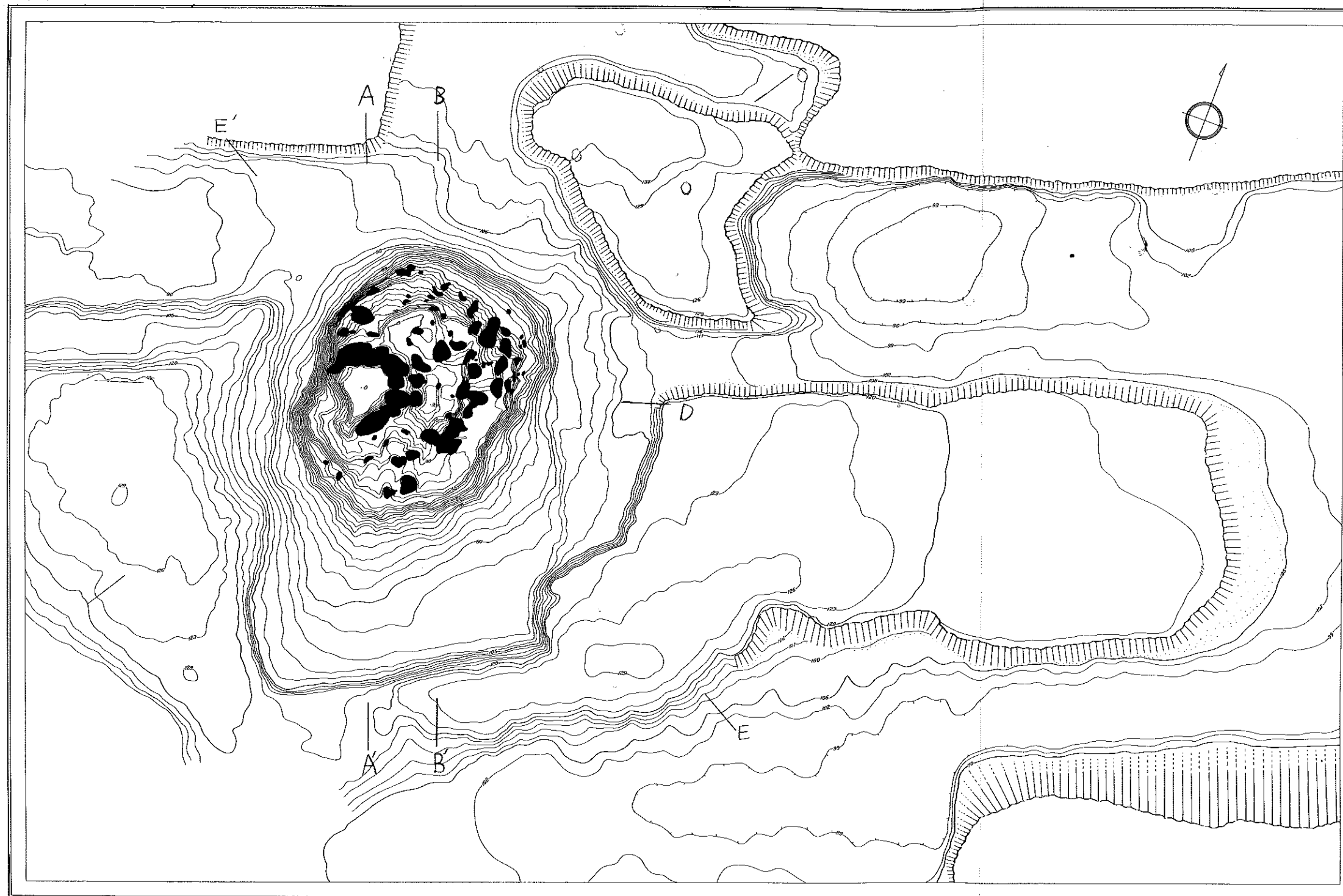


挿図5



1号井戸全測図（ステレオ写真1）

1:15



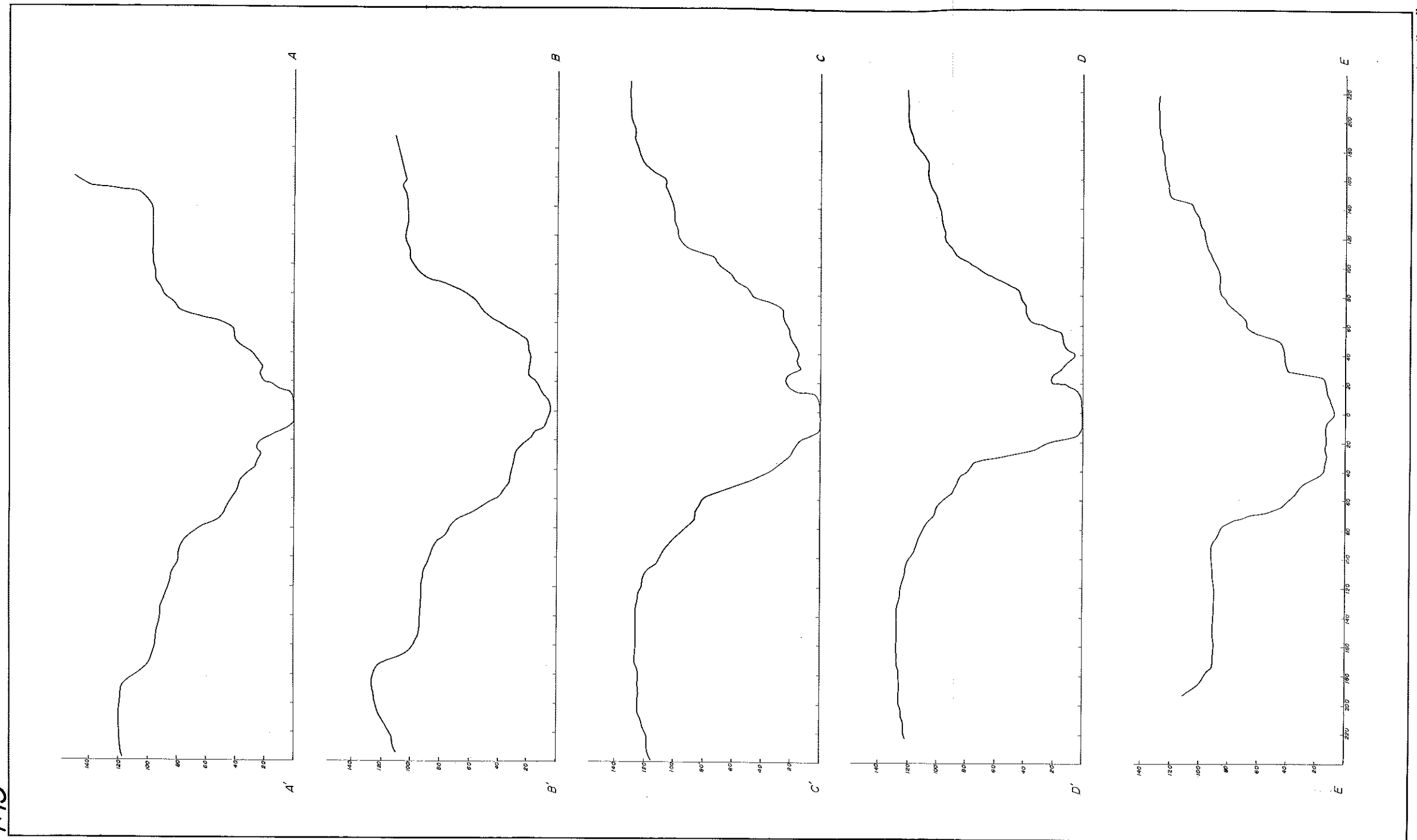
1:15

埼玉県大井町教育委員会
純写測量センター
測量 興国 航業 株式会社

大井戸遺跡(一号井)

1:15

1号井戸断面図 (ステレオ写真2)



2号井戸遣構

2号井戸は、1号井戸の西側約60m、砂川掘の北側4mの地点にあり、口縁部の一辺1m20cmの方形井筒である。

井筒内木組みの構造は、丸太材を横に使って積み上げた丸太壁で、校倉造風に四隅に切り込みをつくって組み合わせて4段に積み上げている。井筒の内壁を防ぐと共に、井筒の歪みや崩壊を防ぐために、各丸太に切り込みをつくって縦棧を用い、上下の連結を兼ねて井筒を強固なものにしている。

丸太の材質は底木の西と北に栗を用いている他は、全て松材である。更に底木の四隅には、約6cm四方の竇孔をあけ、楔で各丸太を連結し、より堅固なものにしている。丸太の太さは約15cmで、地表に近い丸太は、井水に完全に浸水していなかったと考えられて、腐蝕がはげしく太さも細くなり原形をとどめていない。井筒の内り約85cmで、口縁部一辺の長さ20cmの差がある。普通、素材の関係で井壁の形状は口縁部からほとんど垂直になるのが一般的である。

2号井戸の場合は、土地の人の話しによると元来は地山井筒であったが、井壁を四方に塗り、木組を組んだという。このことから、口縁部の一辺の長さは、その補強工事の際に口縁部を広げ、周囲に石を敷いて地盤固めを行なったときに広くしたと考えられる。

木組の高さは約70cm、地表面から本組の上端までの深さは約2mである。井筒内は狭く、井壁の崩壊、危険度を考えて、地表面から3m20cmのところまで発掘を断念した。

一般に井戸には地域性が著しく、その地の地形、地質、地下水等の状況に強く影響されて、同一の地域には同一の形式のものがつくられる傾向が強い。砂川掘沿いには、この他にも、下流（金山、滝山）などに一連の井戸が見られる。

2号井戸の井水の汲み上げ方法は、地元の人たちの話と、大井地方の他の井戸例からも、釣瓶式井戸であったと考えられる。井桁跡は、明確ではなかったがローム上面で確認できた井戸プランに、人頭大の石がみられたところから、井桁の礎石と思われるが、この石は上述の木組を組み立てる際の補強の石ともみることができる。

更につけ足すなら、2号井戸井筒内下部の木組は、井筒組み立て法からみると井戸内で組み立てた打ち込み式の井筒である。

2号井戸出土遺物

井戸底まで発掘しなかったため、井戸そのものの年代を決定する遺物は出土できなかった。遺物は井戸上縁部より約50cmぐらいのところから出土したものがほとんどであった。陶器片、内耳土器片（挿図6）など数点、内耳土器は大小出土しており、直径28cmが最大のものであった。小さい土器には内耳はなく、胴部に直径5mmの穴を左右両端にあけてある。焼きは荒く、大ききの割には軽い。他に縄文土器2片を出土。

2号井戸出土遺物

插图6

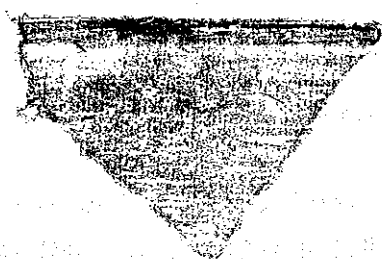


插图7

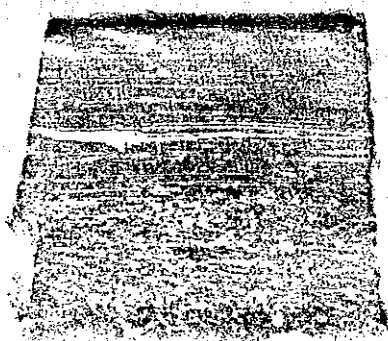


插图8

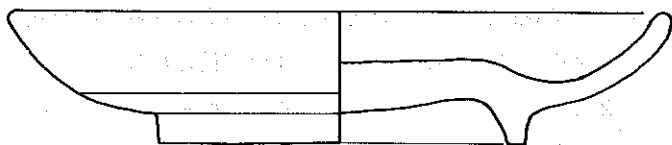


插图9

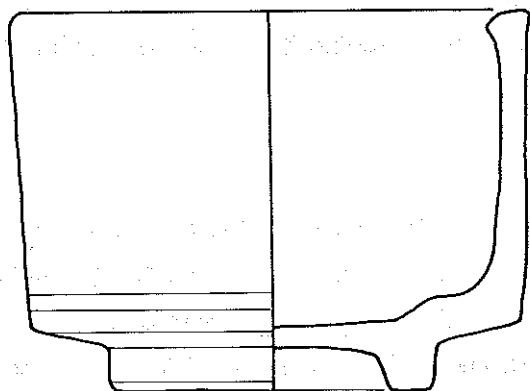
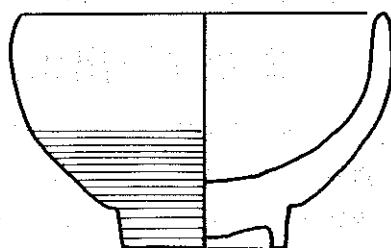
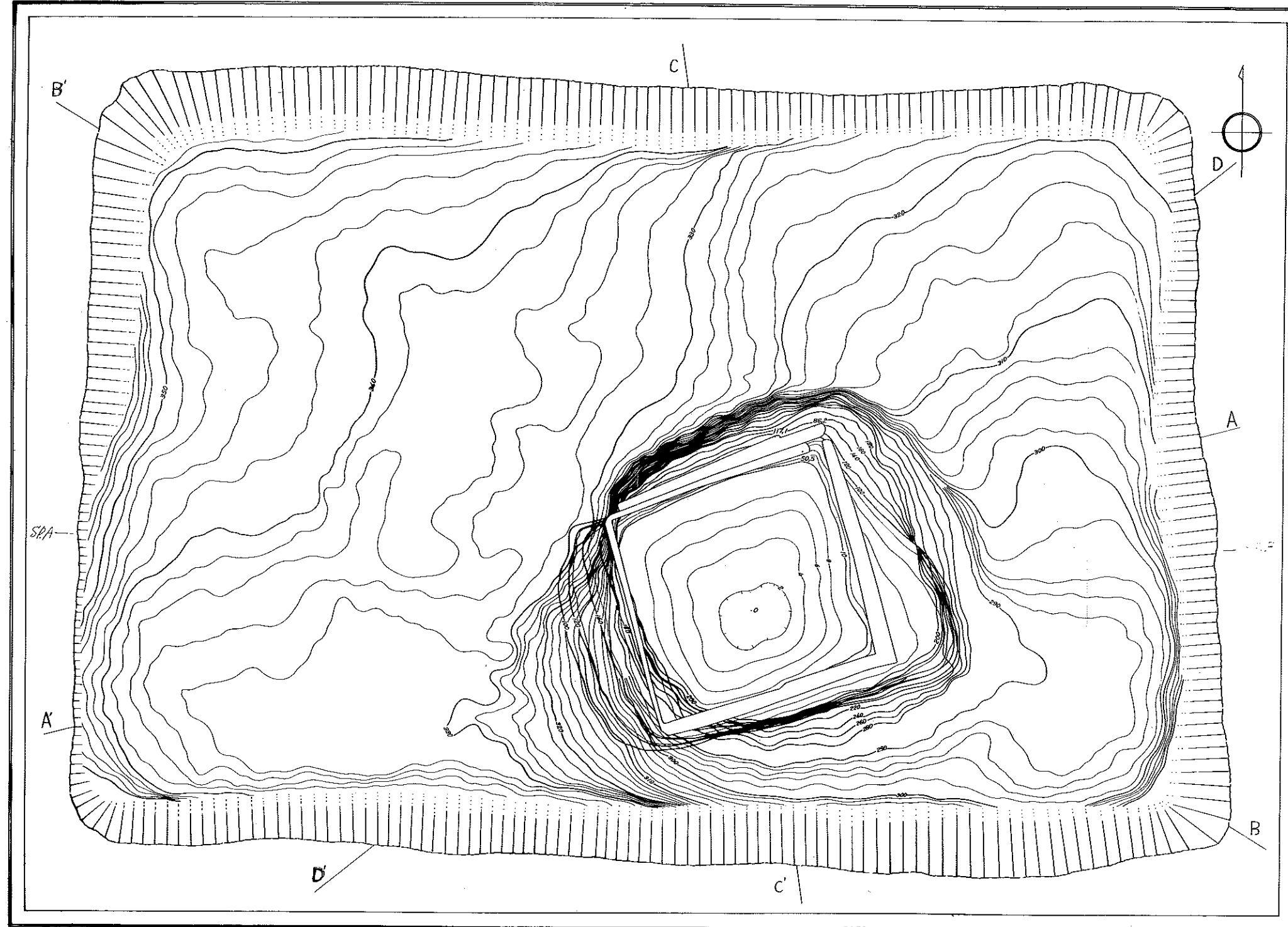


插图10



2号井戸全測図 (ステレオ写真3)

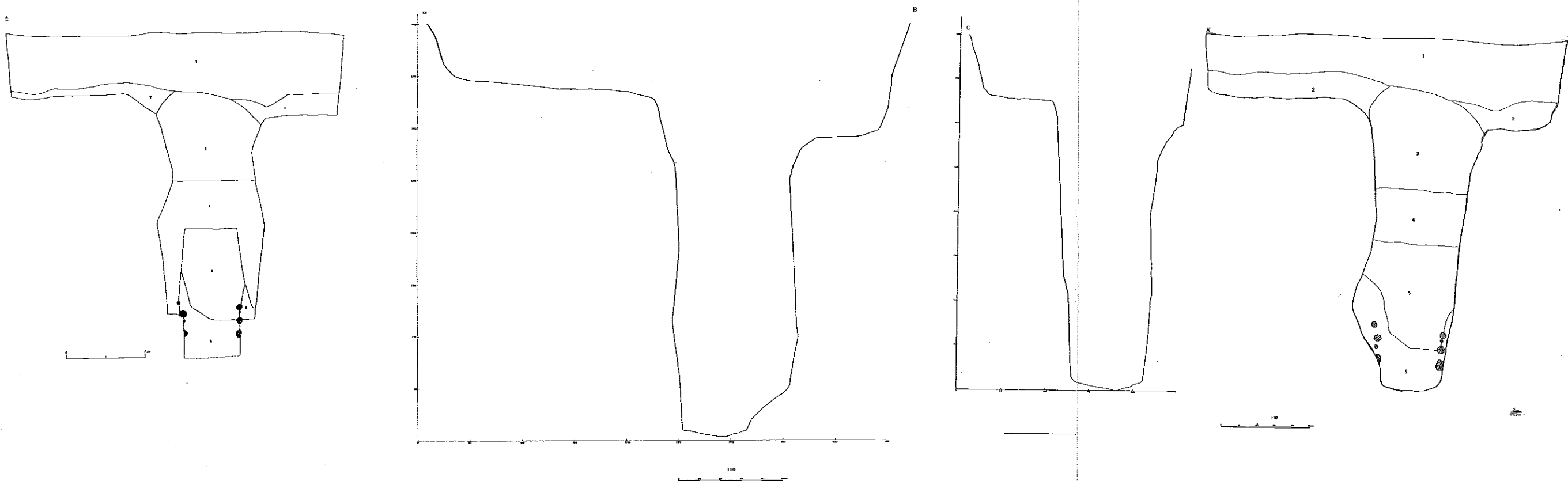
1:10



2号井戸断面図（ステレオ写真4）

2号井戸土層断面図説明

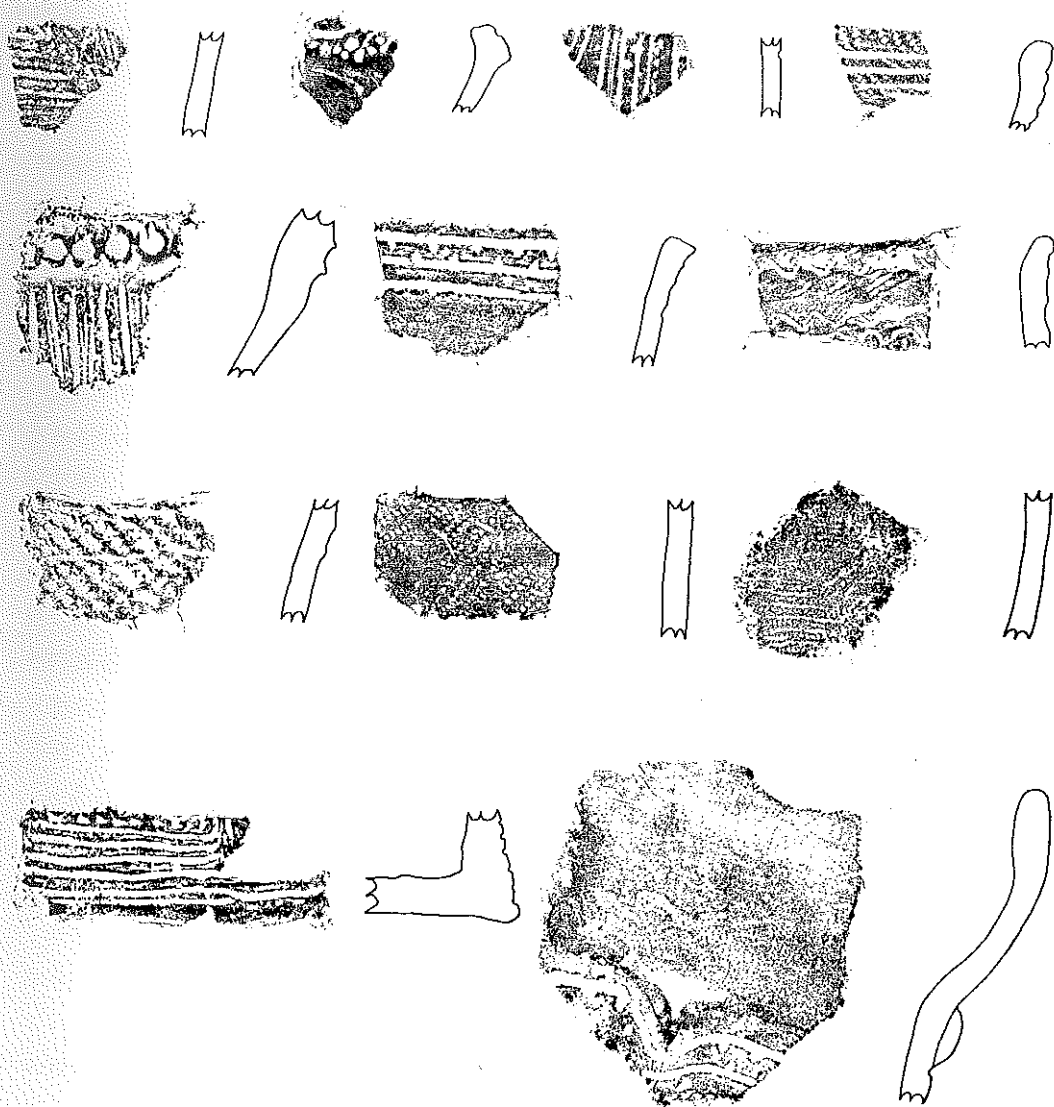
- 第1層 表土、ゴミなどを多く含む褐色土層。
- 第2層 しまりのない軟質な褐色土層。
- 第3層 大小の礫を含む、粘性を若干もつ褐色土で、遺物は全てこの層の上部から出土。
- 第4層 大小の礫を含み、粘性をもつ粒子のこまかい暗褐色層。
- 第5層 大小の礫を含む茶褐色砂層。
- 第6層 木組付近に黒色の腐蝕土を含み、5層に類似した茶褐色砂礫層。

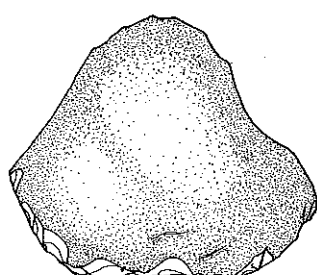
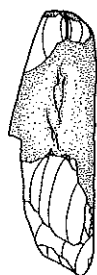
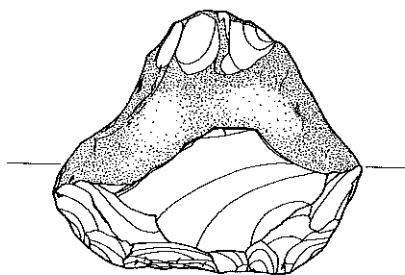
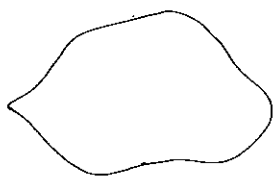
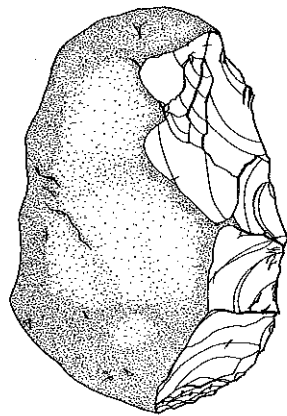
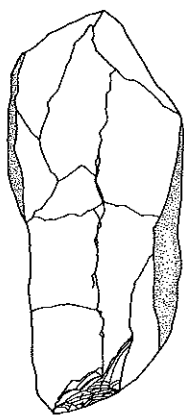
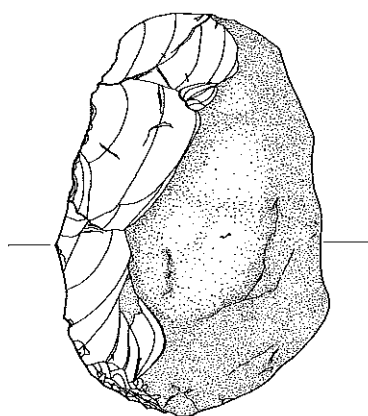


その他の出土遺物

その他、井戸に関係ないトレンチから縄文土器を数十点出土。

第1トレンチN'から前期土器2片、Mから胴部1片。第2トレンチ3区の暗黒色層から胴部2片。第3トレンチからは前期土器の底部(4分の1)と胴部2片を出土。第4トレンチ6区から前期土器2片、7区から1片。第5トレンチ1区の赤褐色層から中期土器片9片を出土。第6トレンチ1区から2片を出土している。3T立川砂礫層上から片刃礫器を1点、公民館大井分館北側の斜面から大形の石器(チョッピング・ツール)を1点表採。





1号井戸遺構の所見

大井町の大井という地名は「新編武蔵風土記稿」(文政年間に編著)の大井村の条に「小名、大井戸、村ノ東ニヨリテアル土人或ハオキドトモ呼フ昔古井ナトアリテ村名モ此井ヨリ起リシ旧地ナルニヤ サレト其ツタヘヲ矢セリ」とあり、大井の発祥の地の井戸は文政年間にはすでにないことがわかる。

また大井町大井で管理している「元禄9年(1696)武蔵国高麗郡下仙波之内大井郷水帳には「おい戸」の名が出ており、その地に畑が約5反あることが記入されている。これにも「おい戸」の位置を示す井戸そのものは出ていない。

明治9年(1876)武蔵国入間郡大井町一筆限斜詰記(附3.13図)によると大字東原240番、神明社境内が7坪あり、地元の人々は水神様とっておりこの南に井戸があることが考えられる。(地元では屋敷や水神様の辰巳(南)に井戸をつくるのが習慣になっている)。この水神様は「新編武蔵風土記稿・大井村」の条にある根上明神社(附1.)に相当するもので、現在は氷川神社に合祀され空地となっているが、古い櫓がその面影をとどめている。

大井町大字大井、塩野磯吉氏宅に伝わる天正7年(1579)12月14日付の古文書によると、大井之郷の地名が出ているところから、このとき井戸の名がすでに地名となっていることを示している。

大井の地名の起源は、武蔵七党の村山党の一族「大井五郎大夫」がこの地に住したことに始まるといわれ、井戸から大井名が出たとすれば、鎌倉期の12世紀には、この井戸が存在したことを示し、また小字「おい戸」の東側には、鎌倉街道と地元民によっていわれている「古坂」が通っている。

これらのことと共に、今回発掘した1号井戸遺構は、神明社の南約45mの所に位置し、井戸施設遺構北部分の上縁部からは、平行状叩き目の須恵器(挿図4.)が一片ではあるが出土した。その古さは前述した時期と照応するのであらうと思われる。

また、井戸施設遺構の南へりからは、内部をへう整形し、外面は剥離がひどく、その様相は不明であり、時期を知りえないが、褐色の素焼土器一片が出土している(第6図、ロ)。

出土遺物は極めて少ないが、須恵の遺物片及びこれを補う前述した史料や、里人の言い伝えなどの傍証によって推察すれば、この井戸の成立は少くとも鎌倉期以前にまでさかのぼることも考えられよう。

井戸としては、施設遺構や井筒も割に簡素で古式のタイプ系統に属するものといえよう。しかもこの1号井戸は台地縁辺の谷底につくられ、浅い掘鑿によって用水が得られる特徴を有している。したがって七曲の井戸が不老川のへりにつくられたものであるが、同川の武蔵野台地の浸蝕は極めて僅かで、十分な谷を形成しなかった。この地域が台地中央部に属し、しかも水位が極めて低く武蔵野の特色を示している。したがってその名の如く、深く掘らねば用水を得

られなかったのである。これに対し、大井の1号井戸は水位の高い谷底に構築したため、七曲ほど大がかりな規模を要しなくとも簡素な施設で水を得ることができ、その目的を充分果すことができたのである。

2号井戸所見

2号井戸も曾祿川の谷底に近く、1号井戸の設置よりやや高いが、地形的には、曾祿川の水が枯れても同川の両岸台地に浸透したその帯水層から湧き出やすい谷底に、井戸を掘った点で、共に同一条件の位置に設置されたものである。

標高21mの地表面を掘り込んだ2号井戸は、近所の古老の話しによると、昭和9年(1934)まで補修しながら使用していたということである。

明治9年(1876)の「武蔵国入間郡大井町一筆限斜詰記」に、ここに居を構えていた人は、仲野平五郎氏であることが記されている。同氏の父も同所に住んでいたことを近所の古老が話しており、したがって当然この井戸は江戸末期には掘られていて、使用されたことを示している。

2号井戸の今回の調査は、井戸上端部より井筒内に向って、深さ3.3mの地点で発掘を終了せざるを得なかった。それより以下は、壁の崩落が極めてひどく、生命に危険を感じたためである。しかし、井筒の底部は残したが、その大部分を発掘することができた。

検出された遺物からも前述した時期に相当するものより古いものは、全く認められなかった。井筒内部からの出土遺物で特徴的なものは、江戸時代後半期に属する内耳土器(径28cm図6)や、明治期の絵皿(図8)、高台付茶碗(図10)の陶器片などをあげることができる。

これらの遺物からしても、2号井戸の構築年代は、およそ江戸終末期とみなすことが妥当であろう。尚、井筒内下部には丸太材をもって方形に組まれた木組が確認されたが、これは井壁の崩落を防ぎ補修したもので、井筒内で組み立てた「打ち込み式」をもって再使用したのである。

当地域において、1号井戸のような共同体所有から、各農家の個人所有の井戸へ移行したのは何時頃であろうか。三富新田をはじめ各所に今もみられる武蔵野新田開発は、元禄期頃から享保にかけて拓られたものが多く、この時期に漸次個人所有の井戸へと移行していったのである。

附 説

附 1. 参考文献

1. 新編武蔵風土記稿（抜すい）

大井村

大井村ハ郡ノ巽ノ方ニアリテ大和田村ヨリ河越城ニ至ル街道ノ宿駅ナリ仙波庄三芳野里ト称ス江戸ヨリハ七里ノ行程ナリ其広狭ノ大様ハ東西ノ径リ十四町餘南北十町餘南ハ藤久保村ニ隣リ北ハ亀久保勝瀬ノ二村ニ及ヒ西ハ永井村東ハ苗間鶴間ノ二村ナリ家数百十一軒大抵街道ノ左右ニ並ヒ住ス当所ノ開ケシハ古キコトニテ其詳ナルコトハ知ヘカヲサレト回国雜記ニ河越ト云所ニイタリ大井河原トイヘル所ニテ

ウチ渡ス大井河原ノ水上ニ山ヤアラシノ名ヲヤトスラント読賜ヒシ歌モアレハ文明ノ頃沙汰アリシハシラル萬葉集ニ伊利麻治能於保屋我波良能伊波為都良比可婆奴流奴流和爾奈多要曾称トアルハ是当所ノ歌ニシテ昔ハ大野ト唱ヘシナラント釈ノ契仲イヘリ是ハイト古代ノコトナレト暫クコ、ニシルシ置リ正保ノ頃米津彦七郎某カ知行ナリシ由モノニミエタリ元禄十年彦七郎ノ孫梅千助某カ時ニ至リ故有テ収公セラレテ御代官細井九右衛門支配セシカ同十一年河越城主松平美濃守某ニ賜ヒシヨリ河越城附ノ領地トナリテ今ハ松平大和守カ知ル所ナリ檢地ハ元禄十一年松平美濃守ニ賜ヒシ頃改メアリシヲ定トシテ租米ヲ出スト云

小名 大井戸（村ノ東ニヨリテアリ土人或ハオキドトモ呼フ昔古井ナトアリテ）
村名モ此井ヨリ起リシ旧地ナルニヤサレト其ツタヘヲ矢セリ

大川八ヶ（同シ辺ノ小名ナリ又川端ノ子川ト云小名モ村内ニアリ）上、中、下、大沼丸、フウデン、アラク、所道、ゲンニウ

古坂（村ノ東ニヨリテアリ昔ノ街道ハ此坂ニカカリシト云）
今ノ街道ニモ坂アルヲ以テ古坂トハ呼ヘルナラン

根上明神社（祭神ヲ詳ニセス例祭三月女）
二日九月十八日両日ヲ用ユ

金山権現社（コレモ祭神）
ヲ詳ニセス

久保権現社（同上）

高根権現社（同上）

弁天社

第六天社（以上七社）
本乗院持

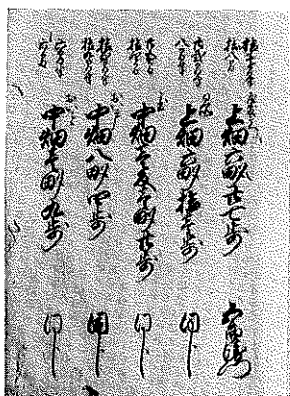
稻荷社（村民）
1持

本乗院 (天台宗古尾谷本郷満頂院ノ末ナリ天
 龜山徳性寺ト号ス弥陀ノ立像ヲ安ス)

観音堂 (行基菩薩ノ彫セ
 ル像ヲ本尊トス)

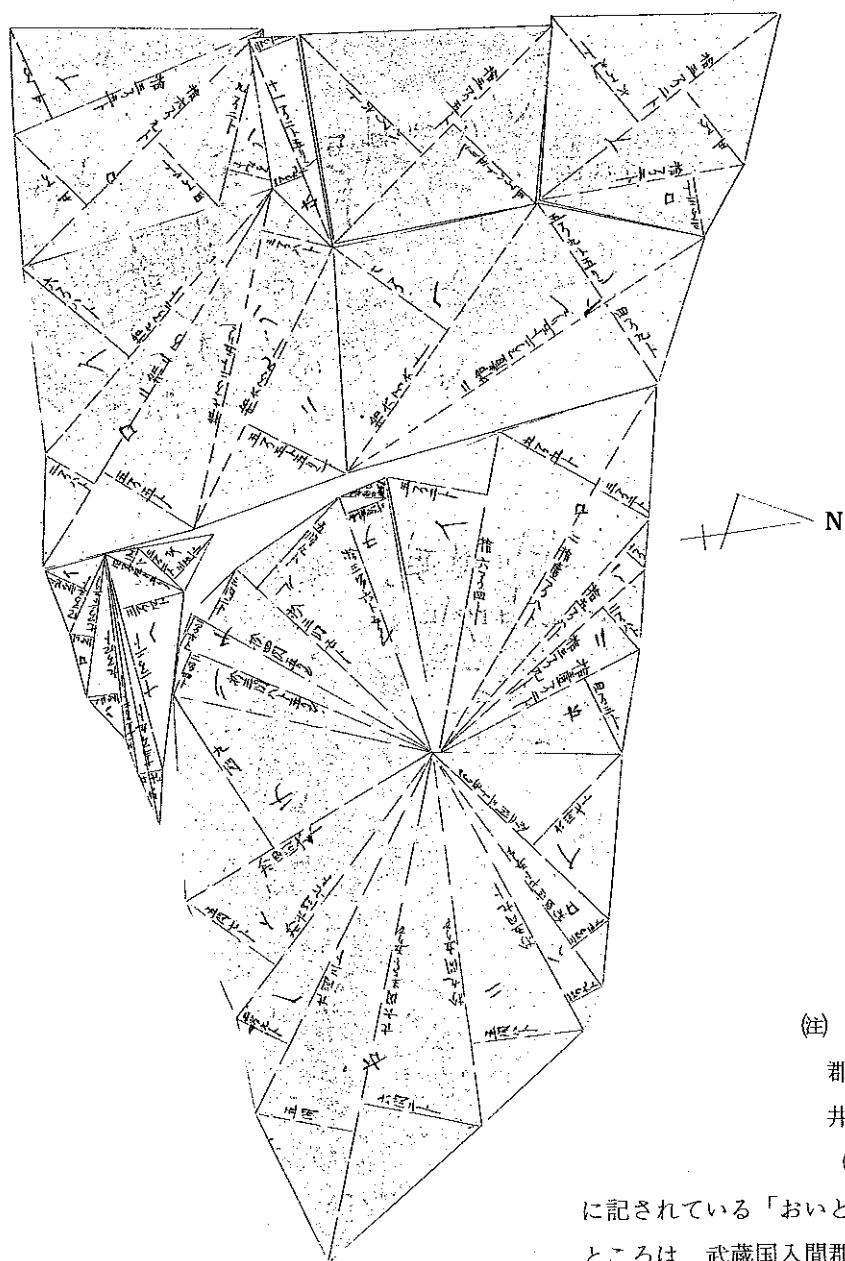
観音堂 (村民
 1持)

2. 武蔵国高麗郡下仙波内大井村田畑水帳に記入されている「おいど」(元禄9年)



拾壹間半	屋敷そへ	上畑六畝廿七步	五郎衛門
拾八間	同 所	上畑六畝拾壹步	同 人
廿貳間半	同 所	中畑壹反壹畝廿步	同 人
八間半	○ ○	中畑八畝四步	同 人
廿五間	○ ○	中畑壹畝九步	同 人
拾四間	おい戸		
拾貳間半	おいど		
拾九間半			
六間半			
六間			

附 3 . 武蔵国入間郡大井町一筆限斜詰記の図



(注) 武蔵国高麗
郡下仙波内大
井村田畑水帳
(元禄 9 年)

に記されている「おいど」の地名の
ところは、武蔵国入間郡大井町一筆
限斜詰記（明治 9 年）の図によって
上図のように復元することができる。
この地域に今回の発掘によって調査
された 1 号井戸、2 号井戸が存在す
る。

総括と考察（1号井戸）

この発掘調査によって明らかにできた大井戸跡を、その形態と規模の観点からみておこう。

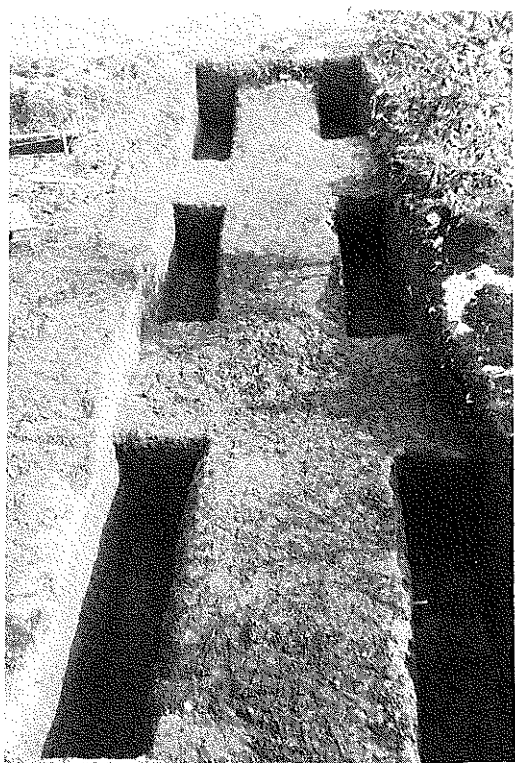
大井という地名が、この大井戸と密接なものと考えられることからしても、この井戸が武蔵野の掘兼の井戸などと類似する性質のものであることを先づ指摘しておきたい。

この大井戸跡には、2つの特徴点をあげられる。まず1つは、発掘の結果、確認できた施設遺構の最長部で約8メートルを測る。これは北入曽の七曲の井や、羽村町の螺井のような深い漏斗形の構造とは比較できないが、曾祿川をひかえた水位の高い地形を考えた場合、この井戸はむしろ狭山市掘兼の掘兼神社境内にある井戸のような浅くて緩い傾斜をもった漏斗状の構造をもつことを想定することは可能であろう。確認できた施設遺構は、井筒口縁部の外側に小礫で15～20センチメートル高く築かれている。これは水を使用するための施設ないし足場につかわれたものである。また井戸そのものについていえば、椀形の井筒を中にして、その外側に緩やかな漏斗形の口縁部をもっており、湧水はこの口縁部から先の足場の境まできていたものと考えられる。そして、井筒の下にこぶし大の石で組みあげられた半球形の湧口が砂礫層に設けられている。この井戸本体の形態は、武蔵野台地では非常に古い歴史のあるものであり、殊に湧口の遺構は、七曲の井戸や掘兼の井戸などの後代の構造とはちがって、原初の形態をそのまま残しており、きわめて貴重なものである。

つぎに指摘できることは、この井筒の中からは、土器片、その他生活遺物が一切出土しなかったことである。古代から共同で用いられた井戸には、多く鏡、玉などを納置して祭祀が行なわれたことが報告されている。共同体や、旅人の共用する井戸は神聖視され、なんらかの信仰を伴ったのが一般的習慣である。この井戸についても同様のことがいえんのではないだろうか。というのは、大井の部落だけでなく、後に鎌倉街道と呼ばれた往還にもうけられた根ノ上神社の社殿の正面に位置しているようなことから、そのことは充分想定できる。しかし、この井戸は共同井戸として使用され、鎌倉、室町期においては大井氏の館とのかかわりもあり、幾度か底を浚いながら使用された。この周辺にあったと思われるゆるい漏斗形傾斜も、そうした過程で破損されたとみられる。そうしたことから、祭祀的な埋納物だけでなく、生活上の遺物などが確認できないだけである。このことは同時に、この井戸が戦国ないしは、それをすぎる遠からざる時期に一時に廃棄され、埋没させられたことを示している。戦国の大井の郷侍四人衆のうち、塩野氏の一門の塩野家がこの大井戸を領して屋号を「おいど」と称するようになったのも、この井戸が廃棄された後のことである。



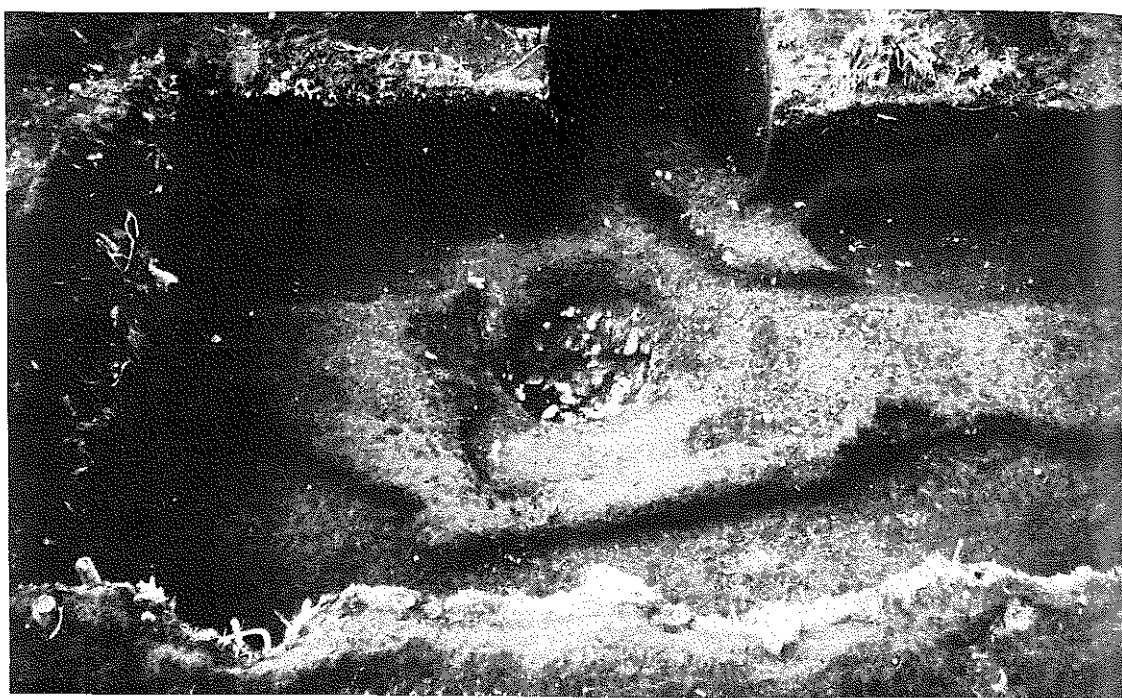
1 T から 2 T、4 T を望む(西方から)



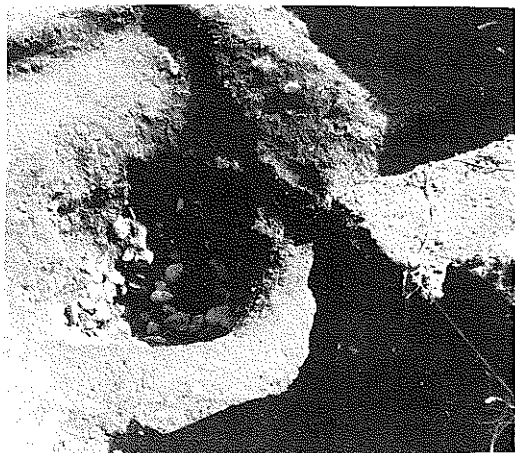
1 T 全景



2 T 全景



- ▲ 1号井戸全景(南より望む)
- ▶ 1号井戸及び施設遺構全景
(東より望む)
- ▼ 1号井戸全景(東北より望む)



1号井戸礫出土状態



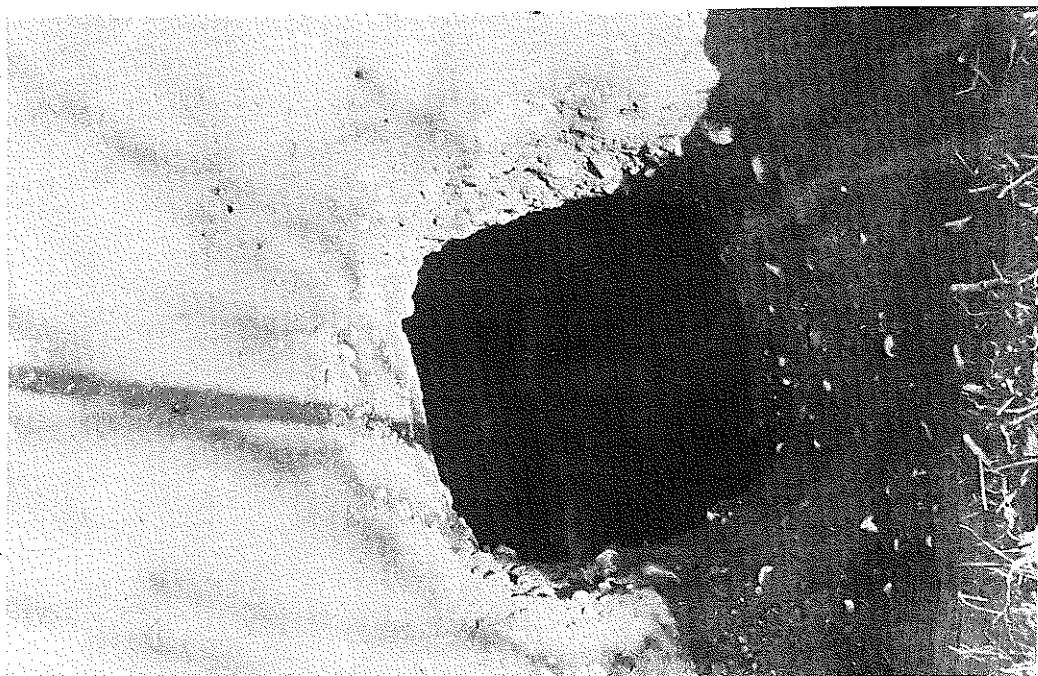
1号井戸施設遺構北部分(発見当初)



1号井戸東西断面(北より)



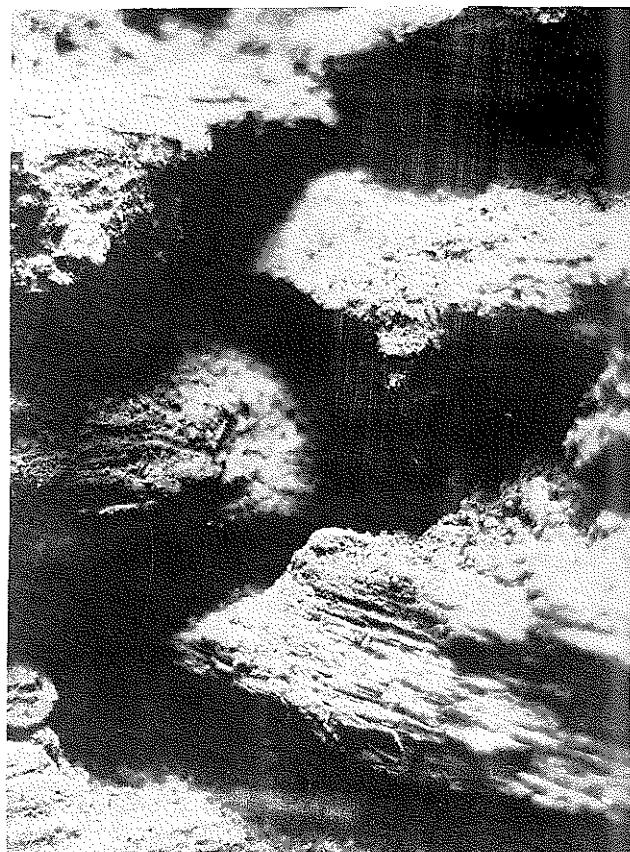
1号井戸全景
右よりにある円形石組
が井戸中心部である。



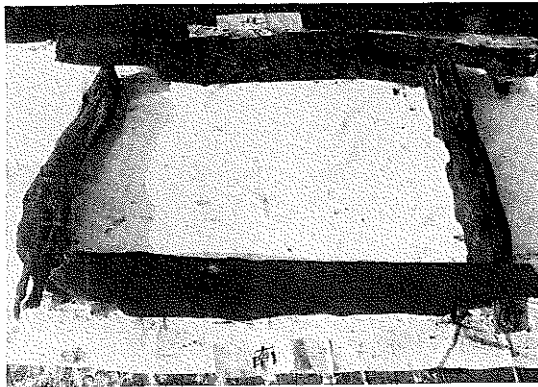
2号井戸全景



2号井戸井筒木枠

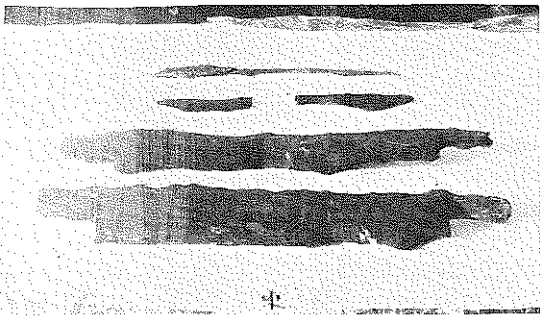


2号井戸井筒木枠の組み方

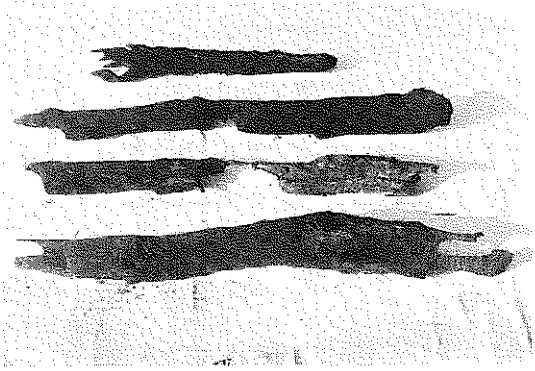


2号井戸井筒内枠組

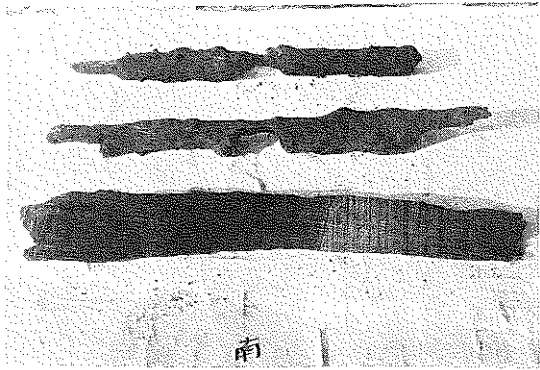
2号井戸井筒内枠組に用いた木材



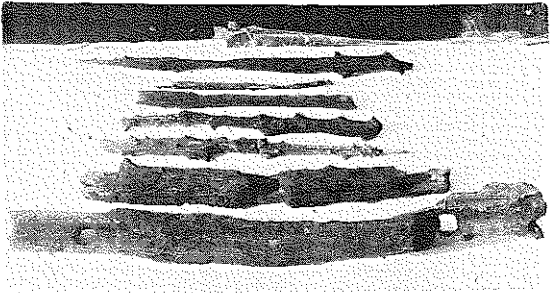
東



西



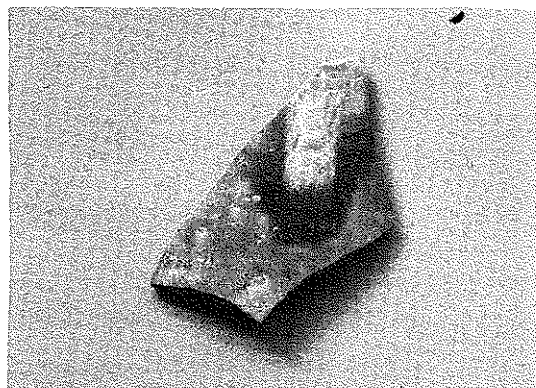
南



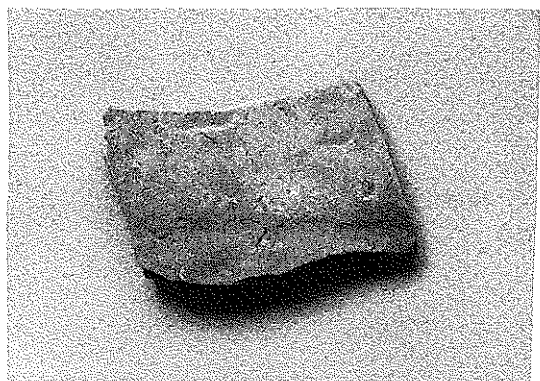
北



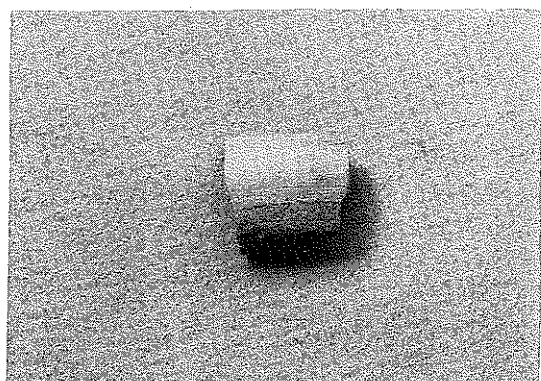
1号井戸叩き目のある須恵器片



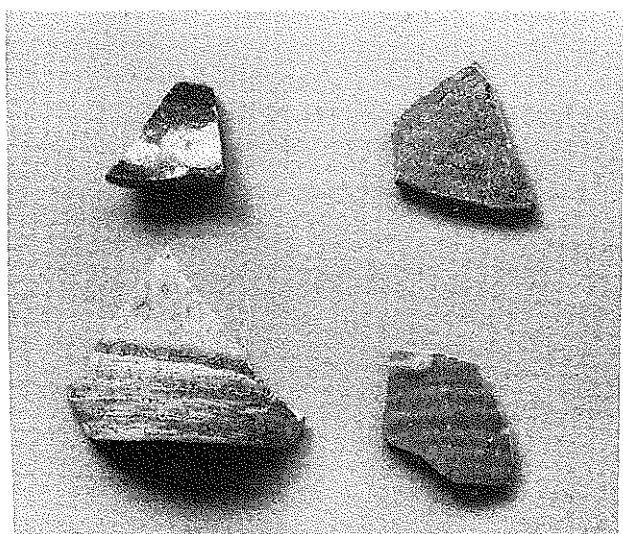
1号井戸東敷設置構出土大甕片



1号井戸の上層部出土の把手付き陶器片



1号井戸南側出土須恵質土器口縁部



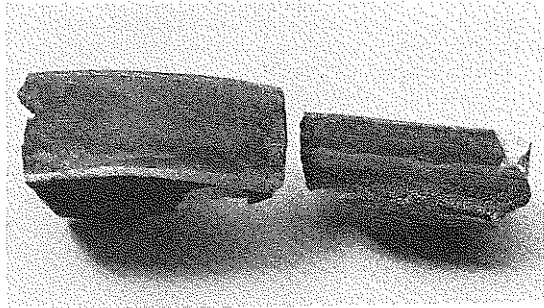
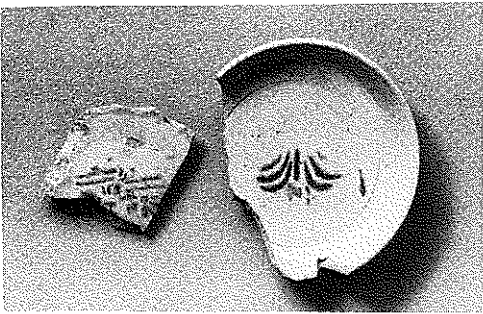
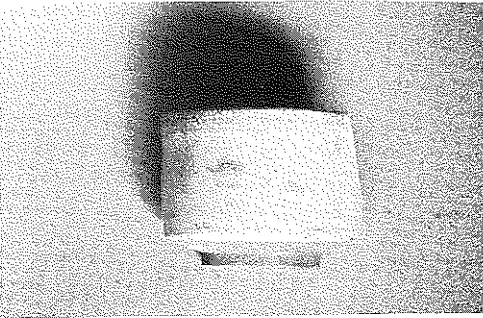
高台付茶碗

1号井戸の西側暗褐色土層より出土

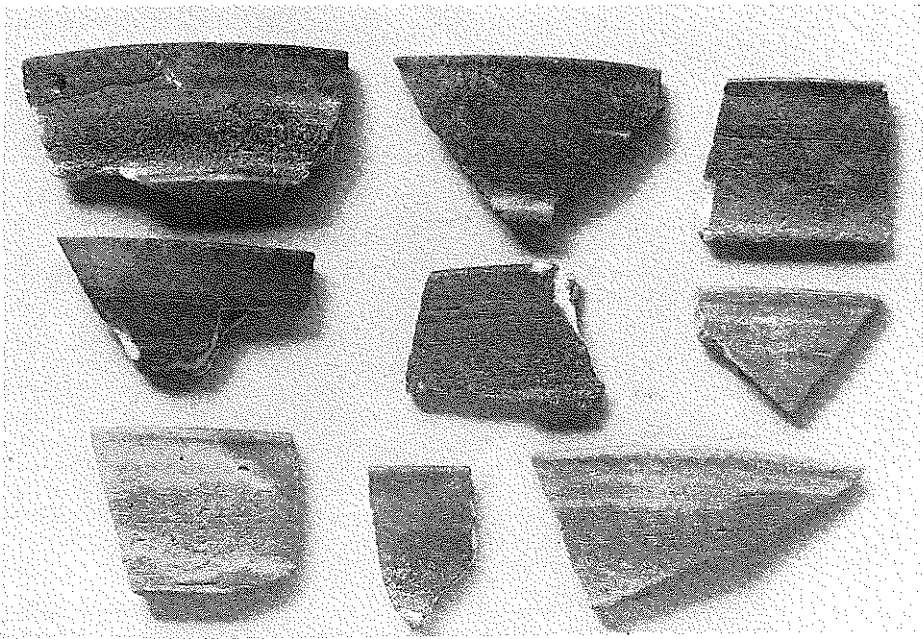
図版 7

2号井戸出戸遺物

茶 碗

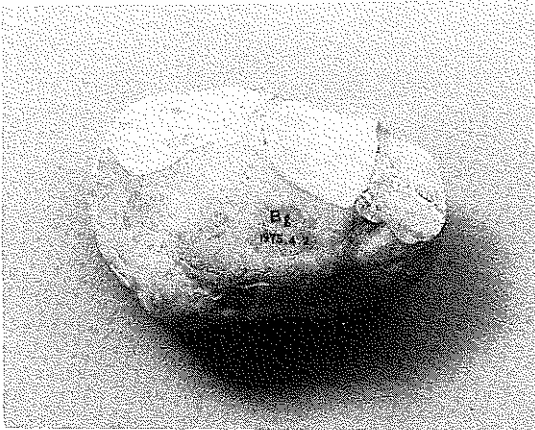


内耳土器片

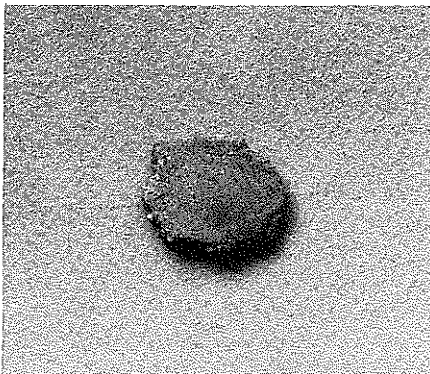


内耳土器片

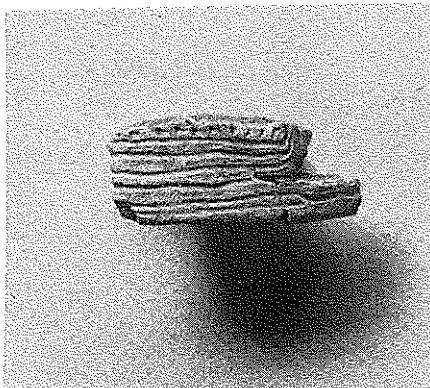
図版 8
その他の遺物



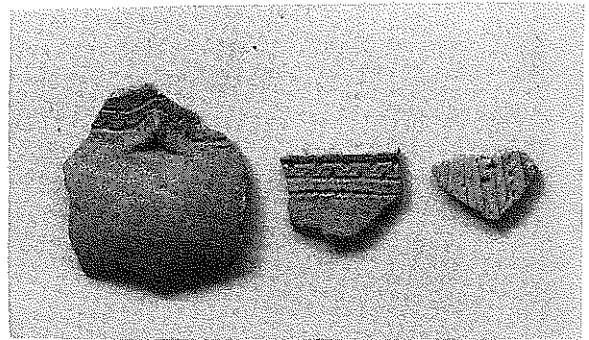
1号井戸南東斜面から出土の石器



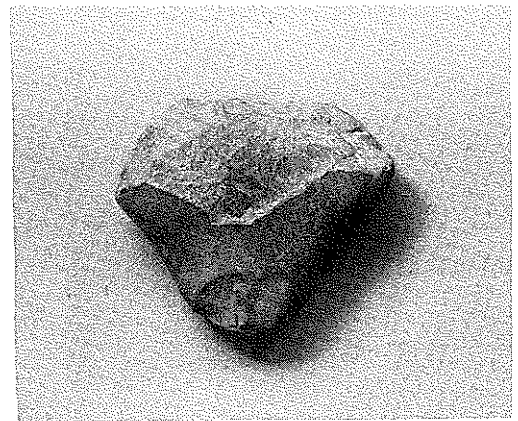
5 T から出土の縄文土器片



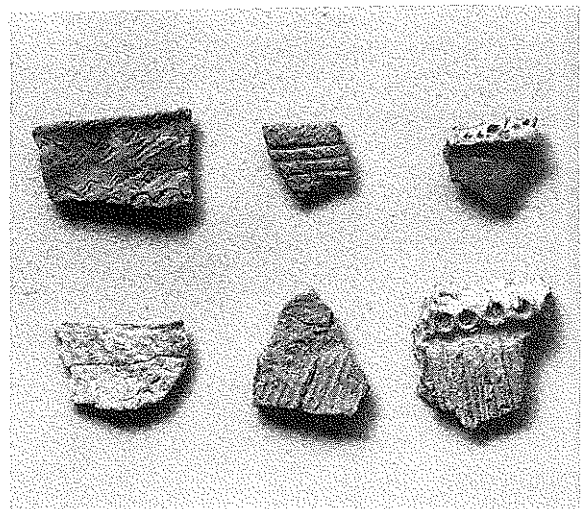
3 T から出土の縄文土器片



4、5 T から出土の縄文土器片



3 T 立川砂礫層上から出土の石器



5 T から出土の縄文土器片

大井戸跡発掘調査団

調査主体 大井町教育委員会
調査担当者 松本新八郎、小泉 功
調査協力者 和島 明、島 弘、小山田洋子、坪田幹男
佐々木栄一、山口清貴、荒木正史、堤政博
村越明雄、岡 勝之、川崎秀樹(以上専修大)
鹿島英明(法政大)
高橋 敦(明治大)
佐藤 正(学芸大)
川越高校卒業生有志
川越高校郷土部部員
大井町郷土研究会
報告書執筆者 松本新八郎、小泉 功、坪田幹男、
鹿島英明
編集者 小泉 功、坪田幹男、先山利男(教委)
発行者 大井町教育委員会

発行 昭和51年3月25日
発行者 大井町教育委員会
埼玉県入間郡大井町亀久保1103-1